

東西文明の比較 (10)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

大陸と日本の交流について、興味ある説があります。交流には、東アジアの自然(植生)が関係していたということです。大陸をも俯瞰した考えです。

「中国は、長江と淮河の間域を境として南北に2つの森林地帯を区分けします。南側は常緑のカシ類を中心にシイ類・タブやツバキなどの「常緑広葉樹林帯」。ヒマラヤの中腹からアッサム・雲南の高地、長江以南の江南山地を経て朝鮮半島南部や日本列島西部(中部地方を境)に及ぶ地域です。これに対し

て北側の森林地帯を「落葉広葉樹林帯」と定義します。コナラの樹木が中心です。中国東北部からシベリア・樺太、日本列島東部、朝鮮半島北部までを指します。これらの2つの地域内で文化交流が行われていた」という説です。(以上前号のママ)

東アジアの自然と二つの文化類型

中国大陸の森林帯は、長江・淮河を境に南北に分けられます。南側の常緑広葉樹林帯は「照葉樹林帯」とも呼びます。これに対して、北部の森林帯の落葉広葉樹林帯は、「ナラ林帯」ともいいます。これら、「照葉樹林帯」と「ナラ林帯」をそれぞれ特色づけるような伝統的な文化要素が多数存在し、その地域の自然に根ざした特有の文化のまとまりが形成されています。

プレ農耕段階のナラ林文化

中国東北部から朝鮮半島北部に及ぶ一帯とそれに隣接する沿海州やアムール川流域

一帯は、冷涼な気候に適応した、よく似た文化的特色を見ることが出来ます。この地域は紀元前2000年から前1000年初頭のウリル文化、中国東北部では鶯歌嶺^{おうかろう}上層文化にあたります。アワやキビを栽培し、ブタを飼育する農耕の段階に入ったとされています。その農耕は、河北の黄土地帯から伝来したものではなく、北緯50度を中心にアジア大陸を東西に横切る森林・ステップ地帯を経て、中央アジアあたりから北回りのルートで、東アジアに達したと考えられます。その延長線上に、我が国の在来農耕の痕跡が見られます。日本列島へ北から文化的影響が具体的に示す事実として興味があります。

この時代以前のこの地域は、新開流遺跡(黒竜江省)が代表されます。そこからは平底の深鉢型土器や多数の石刃鎌、^{もり}銛の骨角器が出土しています。狩猟や漁労に生活基盤をおきながら、定住していたようです。このころの日本は、縄文時代早期末(7000年前)から前期です。北海道東部の縄文時代早期の遺跡からは、新開流遺跡から出土した石刃鎌や平底の深鉢と同類のものが出土し



図 照葉樹林文化圏とナラ林帯文化圏(佐々木高明著、「日本史誕生」集英社1991年。挿入図を改変)

ています。

北東アジアの石刃鏃石器群にともなって出土する土器には「尖底」のものと「平底」のものがあります。尖底土器グループはバイカル湖周辺からザバイカル地方の落葉針葉樹林帯に分布するのに対して、平底土器のグループは北海道東部、サハリン、沿アムール、中国東北部などの常緑針葉樹林帯（照葉樹林帯）に分布しています。平底の深鉢型土器は、落葉針葉樹林帯（ナラ林帯）には産しない堅果類を「加熱処理法」であく抜き調理する道具ではないかと思われます。いずれにしても、中国東北部を中心に、沿海州や沿アムール地方、サハリンに至るナラ林帯には、縄文時代に相当する時期に、縄文文化とよく似た特色を持つ食料採集民の文化が広がっていたことがわかります。

照葉樹林文化とは

ナラ林文化に勝るとも劣らず、日本の基層文化の形成に大きな影響を与えたのが、照葉樹林文化です。ヒマラヤの中腹から日本に至る照葉樹林帯に、共通の文化的要素があることは、あまり知られていないのではないのでしょうか。ネパール、ブータンから北タイや中国雲南省、貴州省の文化を調査した結果、照葉樹林文化の核心地帯は、雲南を中心にした地域に有り、その文化の発展段階は「プレ農耕段階」と「雑穀栽培を主とした焼畑農耕段階」の二つに分けられること。焼畑段階の照葉樹林文化は、後に水田稲作文化を生み出す母胎になったことが明らかになりました。

この文化の発展段階における主な特色は、茶・漆・絹・麴酒・納豆・餅・スシなどの他に、歌垣・八十五夜・鶉飼いなど、わが国の古い民族慣行の中に深く刻み込まれた文化的要素が、この東アジアの照葉樹林帯にルーツを持つことが明らかになりました。ここで興味が湧く点は、「縄文文化に照葉樹林文化の要素が、どのようにして採り入れられ、日本文化の基層形成に寄与したか、とい

うことです。

鳥浜貝塚での発見

福井県三方湖畔にある鳥浜貝塚遺跡からヒョウタンやリョクトウなどの栽培植物の種子が検出されました。縄文時代前期の地層から、エゴマやシソのほか、ゴボウやアブラナ類の種子が発見されています。ヒョウタンはアフリカ、リョクトウはインド、エゴマやシソは東アジアの照葉樹林帯、ゴボウは南シベリアに、それぞれ起源を持つ栽培植物であり、日本で自生したものではありません。したがって、鳥浜貝塚での発見されたこれらの作物は、いずれもアジア大陸の照葉樹林帯を経て日本列島に、人の手によって運ばれたといえます。

縄文時代前期を境に、この鳥浜からは、さまざまな新しい文化的要素が発見されています。漆を使用した木器類や骨角器、磨製石斧、石皿、編み物などの優れたものです。このような新しい文化の発展を促したものは「プレ農耕段階」の照葉樹林文化の伝来だったと考えられるのではないのでしょうか。ここで誤解の無いようにしなければなりません。

鳥浜貝塚での発見の数々を述べてきましたが、ここでの主たる食料は、クルミ・クリ・ドングリなどの堅果類を中心に、ユリ根などの野生のイモ類、シカやイノシシの肉、淡水魚などを加えたもので、大部分は、狩猟・採集・漁労に依存する生活に変わりはありません。

縄文文化はトータルで考えると、東日本のナラ林帯を中心に、豊かな食料採集民の文化として、その特色を維持してきたとみて間違いありません。ところが、縄文時代前期以降、西日本の照葉樹林帯には、プレ農耕段階の照葉樹林文化が大陸から伝来し、定着したようです。

こうした段階で、縄文文化の東西の「差」は、いっそう明確になったといえるのではないのでしょうか。

(続く)